SANPO NOVELS

草野唯雄

明日知れぬ命

新作長編推理小説

<著者略歴>

福岡県生まれ。鉱業会社勤続20年後，作家生活に入る。著書には『大東京午前2時』『爆発予告』などがある。

SANPŌ NOVELS——3

<長編推理小説> 明日知れぬ命 ¥430

昭和48年6月25日 第1刷発行

著 者 草野唯雄
発行者 中島 宏
発行所 株式会社 産報
(〒105) 東京都港区浜松町1—10—12
電話 東京03 (436) 4151 (大代表)
振替 東京 36786

印刷・壮光舎印刷 製本・秋元製本

落丁・乱丁本はおとりかえします
0293—610702—2779

Printed in Japan
©1973 草野唯雄

明日知れぬ命

目次

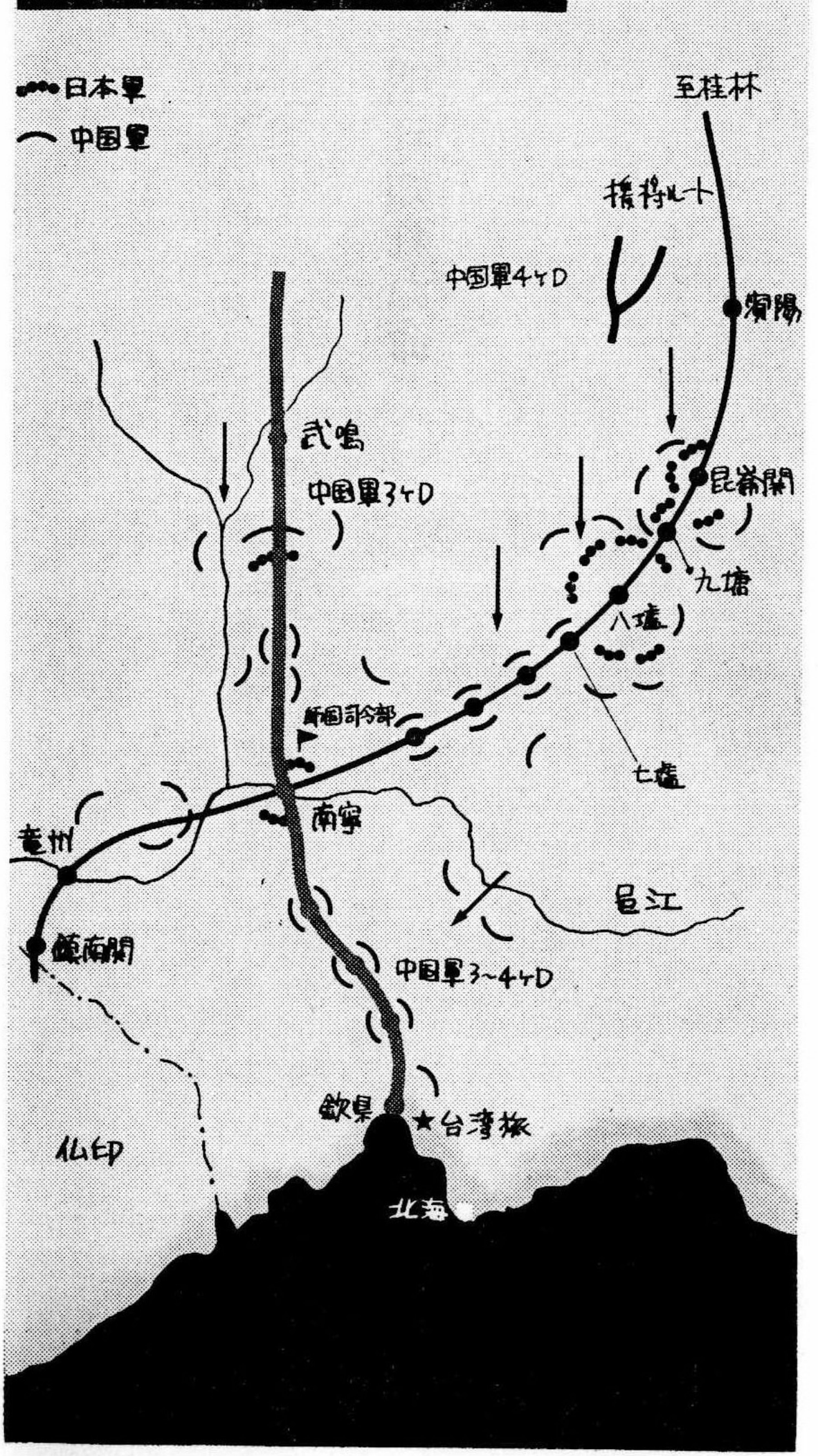
1 海盗 …… 7
2 反攻 …… 13
3 刺殺 …… 24
4 情報 …… 33
5 激戦 …… 43
6 突撃 …… 55
7 師団 …… 63
8 斬殺 …… 74
9 欽州 …… 86
10 元旦 …… 101
11 弾雨 …… 107
12 夜襲 …… 119
13 工作 …… 124
14 国賊 …… 137
15 防蚊面 …… 144
16 厭戦 …… 154
17 騎兵 …… 170
18 盗聴 …… 178
19 洞窟 …… 190
20 呉村（ウォッソン） …… 201
21 疑惑 …… 206
22 真相 …… 216
23 突破 …… 223
24 終結 …… 231
あとがき

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

本文イラスト　有佳多恵子

明日知れぬ命

南寧付近彼我態勢（1939年12月末ごろ）



1　海　盗

一九三九年十一月十日――
珠江の朝は対岸の見分けもつかないくらいの深い朝霧だった。
川幅いっぱいに立ちこめた濃密な霧の下を、黄土色に濁った川水が満々と押し流れてゆく。
その東岸の桟橋にもやった一隻の大発（大型発動艇）の中に、十人の日本兵がひそんでいた。
流れる霧は岸辺の楊柳や、背後の部落の望楼や、それから彼らの頭上に突兀と聳え立つ虎門砲塁などを、絶えず隠見させていた。
川土堤の雑草に薄く朝霜が下りて見えるのは、日中は真夏のように暑く、夜は急激に気温が低下する十二月の南支那の大陸性気候のせいだ。
大発の艇首に固定された機銃座には射手の森山上等兵がついて、既に銃把を肩に当てた射撃姿勢をとり、銃口をぴたりと川の上流に向けている。
その銃身にも、補助憲兵たちの小銃にも、それから村上伍長がサックから引抜いて右手に握っているモーゼルの黒光りする銃口にも、しっとりと朝露がおりていた。
指揮者の資宗曹長はさつきから双眼鏡を上流に向けたままだったが、この霧では大した見通しは利かない筈である。
彼らの左腕の白い腕章に筆太に書かれた憲兵の二字がひどく威圧的な印象を与えていた。
時刻は七時をちょっと回った頃、突然上流の方ではじけるような銃声がした。
少なくとも十挺以上の小銃が一斉射撃をしたような音だった。
「しまった！」資宗が双眼鏡を下ろして立上った。
「やつらに先を越されたぞ！」

「海盗ですか？」
と村上が聞く。
「ほかには考えられんな。急げ！」
手を振って合図する。船舶兵が慌ててもやい綱を解き、エンジンを起動する。
大発はスクリューで川水を盛上らせるようにして躍り出ると、フルスピードで上流へ向った。
平べったいへさきに打当る波しぶきが、さあー、さあーと憲兵たちの上にふりかかる。はらわたを揺するようなエンジンの響き……まだ前方では銃声が続いている。
やがて、行手の霧の中からぼんやりと黒いものがあらわれてきた。
初めはひどく横広いので筏かと見間違えたが、接近するにつれてそれが手漕舟を三艘横につなぎ合せたものとわかった。
殺りくが終ったのか、もう漕ぎ手も、舵手の姿も見えず、ただ川の流れにまかせてゆっくりと下ってくる。
そのすぐ背後から一隻のジャンクが追尾している。
弾帯を肩から斜めにかけた男たちが、今まさにかぎ爪のついたロープを死の舟に投げ込もうとしていたところだ。
「撃て！」
資宗が命令した。
待構えていた機銃が火蓋を切った。
最初の一連射で、ロープを握っていた男の顔がざくろのようにはじけかえるのが見えた。
赤いボロ切れのようになった彼の体が河中に落ちて水しぶきを上げると、慌てふためいた叫び声と共にジャンクはへさきを西岸に向けはじめた。
「よし。あとは威嚇射撃！」
資宗が言うと、射手は機銃の照準をジャンクの上空に上げて射ち続けた。

一発の応射もせずに西岸の方へ逃れ去ってゆくジャンクを見送りながら、須藤という上等兵が、
「吉田兵長殿。どうしてあいつらをやっつけてしまわんのですか？」
と小声で聞いた。彼は補助憲兵の教育を終って配属になってからまだ日が浅い。
「日本人の海盗だからだ」
と吉田が囁き返す。
「日本人ですか？」須藤は目をまるくして「海盗とは何です？」
「海盗とはつまり日本でいう海賊さ。事変前から内地におれなくなって高とびして来た犯罪人たちの集団だよ。奴らは密輸の情報源だから憲兵隊としても或る程度までは放置しているんだ。だが、こんな工合に目に余るとなるとそうもいかん。分隊長としては警告を与えたつもりだろう」
「というと、つまりスパイとして利用しているというわけですか？」
「まあな」
「しかし、情報を売っておいて、自分たちで襲撃するのは変ですね」
「いや、今度の場合は奴らの情報ではなかった。これはほかの筋から来たんだ」
吉田は説明を打切って立上った。
大発は速度を落して舟に接舷した。
ロープを持って乗移ろうとした兵隊たちが一瞬ためらった。舟の上にまぐろのようにごろごろ転がった中国人の死体と血の海を見て、思わず二の足を踏んだのである。
まだ微かに蠢めいている者、死んでゆく魚のように断末魔の呼吸に喘いでいる者、助かる見込みのあるのや訊問に耐えられそうなのは一名もいなかった。
「ひでえことをしやがる」
補助憲兵の一人がつぶやいたのを聞いて、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「なまじっか応戦しようとしたからだろう」
と、舟の上に転がった二、三挺の小銃を村上伍長が顎で示した。
「ものを洗いざらい奪ってゆくだけで、めったに殺しはやらんのだがな」
まん中の舟のともにたくね上げてある漁網の山に背をもたせて、一人の男だけがまだ目を開いていた。が、それももう光りを失った死魚の目だった。
前のはだけたうすっぺらな広東服の間から青白赤緑と、とりどりの色をした内臓がはみ出し、それが投出した両足の間にとぐろを巻いてかすかな湯気を立てている。
ゆっくりとそのまわりを一周した村上伍長が、彼の耳の上にモーゼルの銃口を押しつけるのが見えた。
兵士たちが目をそむけた一瞬、乾いた銃声が川面に響いた。
死体は全部河中に投棄し、血まみれの舟をひっぱって棧橋に帰って来た。
表面はただの漁船のように見せかけてあるが、舟板をはぐと油布の下は医薬品だった。
メンソレータム、キニーネ、クレオソート、仁丹、ヨードチンキ、ヨードホルムその他を満載している。恐らく中国軍衛生隊の用品で、石岐附近か中山県のどこかに荷上げして、そこから奥地へ運ぶつもりだったに違いない。
ただ、情報にあった武器弾薬の類いはいくら探しても出てこなかった。
その代り妙なものがあった。厳重に紐をかけたブリキ缶が五つ。
缶の意匠で見るとどうも広州市内の点心司で作った中国菓子の箱のようだが、棒の先でつき転がしても中身の動くような音がしない。
村上が日本刀を引抜き、及び腰で紐を切り刃先で缶

の蓋をこじあけると、驚いたことに中身は軍票（出征軍が現地で物品を購入するために使用する証票）だった。

十銭、五十銭。一円、五円の四種類の札束がぎっしり詰込まれていた。にせ札ではなく、正真正銘の軍票である。

これらの押収品を二台のトラックに積み終って、直ちに広東へ向けて出発した。

涼しかったのは、走り出してからほんのしばらくだった。

日が昇ると、既に薄れかけていた霧はたちまち跡かたもなく消滅し、じりじりと照りつけてくる太陽で風までが熱風に変るのがわかった。

ことに前車がまき上げる濛々たる土埃りをまっ向から浴びる後続車は哀れだった。

補助憲兵たちは銃口に布をつめ、自分たちはタオルですっぽり顔をおおって積荷の間にうずくまっていたが、それでもすぐに口の中がジャリジャリしてくる。

ぽつぽつ東莞に近づこうかという頃に突然トラックが止った。

エンジンの音がやむとあたりは静かだった。

見渡す限りただ広々とした水田と耕地のひろがりだけで、人家一つ見えない。ずっと遠くの方で水牛を追う小孩（小児）の姿が一つノロノロと動いているだけだ。

東方の道路と平行に走っている広九鉄道の線路の上に、盛んに陽炎が燃えている。

エンジンを冷やすための小休止かと思ったが、そうではなかった。

「みんな降りて、おれのまわりにまるく集れ」

と資宗が命令した。

全員車から降りて集まると、

「お前たちに相談がある」

と言った。

資宗高志。現役志願兵から憲兵曹長にまで叩き上げた男。色はあくまでも黒く、太い眉の下は眼光烱々と光っている。いつもへの字型に固くむすんだ唇の下から顎先にかけて、すーっと一本線をひいたような刀傷の跡が、尚一層彼の顔に凄味を加えている。六尺五寸、七五キロの巨躯と相まって鬼憲兵曹長を絵にしたような男であった。

「一般の戦闘部隊が部落を攻撃占領した場合、指揮官は、一定時間内に限って、ある程度の掠奪を黙認することがある。これは歩兵部隊などでは屢々行なわれている公然の秘密だ」そこまで言ってから、ぐっとくだけた口調になって「しかし、それだからおれたちもやっていいんだというような屁理屈はこねん。ざっくばらんに言おう。要するにおれはあの軍票をこのまま生っ白い経理将校どもの手に渡すのが馬鹿らしくなって来たんだ。そこで村上班長と相談の結果、軍票だけは我々の手で没収することにした」

ゆっくりと部下の顔を見回した。

「但し、私的遊興には一切つかわせない。村上伍長が保管して、公務に使う。情報提供者に対する報酬、公務の乗物代、調査のための経費など、お前たちは今までのようにケチケチせずに、どしどし請求してよろしい。言うまでもないが、これはここにいる我々だけの秘密財源であるから、いかなる事があっても口を割らないという固い覚悟がいる。それが出来るか？」

「どうだみんな。死んでも他言はしませんと分隊長殿に誓えるか？」

村上が言うと、

「誓います！」

と皆いっせいに答えた。

「きっとだな」資宗が念を押した。「もし約束に背いてペラペラしゃべったり、私的遊興につかったりするような奴がいたら、おれが叩っ斬るが、それでもいいか？」

「分隊長どの。ここにはそんな馬鹿はおりません」
補助憲兵を代表して吉田兵長が言った。
「よし」
資宗は大きくうなずいて、
「では軍票だけ別に梱包しろ」

2 反攻

瀧田師団長日記抄

わたしのひきいる師団が、敵の虚をついて欽州湾に上陸したのは一九三九年十一月中旬である。

第一線部隊のあとから上陸したわたしは、師団司令部護衛の中隊約二百名とともに、北方広西(カンシー)省首都南寧(なんねい)に向けて行進を起しはしたものの、道という道はないに等しかった。いや、大自動車道が延々二百キロメートルにわたって通じてはいたのだが、それが徹底的に破壊されつくしている。蔣介石軍が、日本軍は近くこの仏印に通ずる大輸送路の遮断を企てるにちがいない、と見たからであろう。

付近の農民の語るところによると、蔣軍は沿道の各部落民に命令し、それぞれの区間と期日を示して道路をこわさせたという。寸断という表現もあながち誇張ではなく、道をなくしてしまったというほうが手っとり早いくらいであった。道路の大部分は水田(すいでん)になってしまって、もう三毛作の稲穂に実がつきかけている始末。

むろん橋という橋はあとかたもなく、山地を通ずる部分に、ところによってはあるかなしぐらいの小道が残っているだけであった。

わたしは作戦発動前から、馬刈参謀が手に入れた空中写真で、道路破壊の状況はおおよそ承知していた。だが、訓練を重ねた歩兵連隊であるから、少なくとも一日二十八粁は前進し得るものと考え、上陸時に各人に七日分の精米三升を持たせた。兵は二十キログラム

の完全武装の重量に、更に五キロの米を加えられたわけだ。

これだけの重量を背負い、道なき道を歩み、しかも至るところで敵の抵抗を受けたので、歩兵の歩度は一日平均二十キロメートルに落ちた。はじめ七日の行程と考えていたのが早くも十日たち、南寧に近づくに従って携持食糧は欠乏してきたのである。

だが天与の恩恵とでもいおうか、海に面した山斜面のいたるところに蜜柑林があって、それが亜熱帯であるために、つぼみ、花、青い実、黄色に熟した実がいっしょくたに木に鈴なりになっている。第一線をゆく兵隊たちはこれをちぎってのどをうるおすとともに、食料の足しにもした。むろん第二線の兵までは、ゆき渡らなかったが……。

このミカンは平べったくて、日本の富有柿のような形と色をしていた。味はただ甘いだけで酸味はほとんどないといってよかった。

上陸地点に近い欽県の町には敵兵がたてこもっていたが、われわれの師団はそれを避けて通った。この敵を掃討占領して欽寧公路の兵站線を確保する役目は、後続の旅団にまかせてあったからだ。

のち、旅団長梅本少将の報告によって知った欽県掃討戦の顚末はほぼ次のとおりである。

旅団の左翼隊が先発となって、十七日朝欽県南方に到着布陣した。

欽県は、広い平野の中にポツンと置かれたような小さな町で、べつに城壁も望楼もなく、クリークと楊柳の並木にかこまれているだけだ。軒の低いくすんだような家並が石だたみの狭い道を挾んでつづき、ほぼ町の中央と思われるあたりに、地方官公舎か学校かのコンクリート建物があるのが望見された。

たてこもる敵の迫撃砲と味方の山砲がうちあいをはじめたのが、午後二時過ぎからである。彼我の着弾距離の差が、はじめから、大きくものを言った。迫撃砲

弾がわが歩兵の散兵線までは届かずに、いたずらに水田の泥土を飛散させるだけであるのに反して、山砲弾は文句なしに町の中で炸烈した。

おそらくつるべうちの山砲弾で破壊されたのであろう敵の迫撃砲が沈黙したところで、歩兵が前進を開始した。だが、それからは今までのように快調というわけにはいかなかった。

敵は建物のかげにかくれてうってくるのに対して、味方にはこれぞという遮蔽物がない。田の畦やクリークや楊柳を楯として、じりじり前進するのがやっとであった。

砲声の合間を縫うようにして、敵のチェコスロバキヤ製軽機関銃の乾いた甲高い音と、味方の重厚な重機の音が、間断なく応酬をつづける。そのうちに蒼然と日が暮れてきた。

日本軍得意の攻撃チャンスが訪れたのである。

山砲の掩護射撃中止と同時に、各中隊長の指揮刀が、わずかに消えのこった西空の残照を写してきらめくと、歩兵は立っていっせいに城内に突入した。日没と同時に、待構えていたかのようにのぼってきた満月の、こうこうとした明りの中で市街戦が行なわれたが、それも大したことはなかった。敵は算を乱して敗走し、銃声も次第にまばらになって、やがて終息。午後八時、欽県の町は左翼隊によって完全に占領されたのである。

待機していた右翼隊も、つづいて入城した。

この戦いで交戦した敵は、黄固の指揮する約四千の広西軍といわれ、後日、敵の遺棄死体八百五十、捕虜三百九十三と大本営から発表されたが、私の知り得た実数はおよそその十分の一であった。わがほうの損害は戦死三十五、戦傷五十であった。その中にはむろん将校もふくまれている。

さて話をわが師団にもどすと、十一月二十四日のま夜中近く、乗馬で行軍中のわたしたちは前方の山波を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com